

沖

6
2018

俳句雑誌【333】



華燭びらき

能村 研三

麻衣結婚

次女の麻衣が四月三十日に結婚した。娘婿は佐原の出身で福祉の仕事を営む誠実な人で、私の家の近くに住んでもらうことになったのでありがたい。

麻衣が生まれた時、登四郎は次の句を詠んで誕生を喜んだ。

産声の午下りよりじわりと春

我が家は三人の娘に囲まれて賑やかで、登四郎も孫娘たちを可愛がりよく俳句に詠んでいる。

紐すこし貫ひに来たり雛納め

雛月の芋ころげして三童女

麻衣が生まれたのは二月で産院に大雪が降る中見舞に行つたことが思い出される。

凛々しさを眉宇に窺ふ端午なり

洗はれしごとき春光呱呱の声
花棟次女の写真のやや殖えて
子にだけは唄ふ父なり青葡萄

壺活けの極楽鳥花春は逝く

三人の娘は共々妻の出身校の市内の女子高校を卒業したが、麻衣が卒業した時、私は次の句を詠んだ。

春愁や音を刻まぬ掛時計

卒業子等身鏡より出発す

索引は別巻にあり穀雨の夜

卒業後、短大に進学の後、建築の勉強がしたいと専門学校に進み、建築士の資格もとった。能村家の家業である建築の仕事を勉強してくれたことは何かの縁を感じて嬉しかった。

芽柳や娘が携へし凶面筒

今年竹すぐに働く手足あり

最近も、谷中の菩提寺の改修工事に、建築の技術を活かして、細々した工事監督の仕事をしてくれた。

灯台祭茅花流しの中を行く

また昨年から、「沖」の業務部の仕事の仲間となり、入金チェック、発送の仕事も手伝っている。

結婚式当日、娘婿となる秀紀さんが娘を迎えにきてくれたが、女性の支度が長引いていたので、庭でしばし話をした。

ほつほつと雨受く翳りなき植田

ちょうど朴の花がたくさんの花を咲かせており、これも娘の結婚を祝福してくれたのだと思う。この見事な咲きぶりを娘婿と一緒に仰ぎ見ることができたのも感慨無量である。

麻衣結婚

嫁す吾子に華燭びらきの朴の花

二人でこれからあたたかい家庭を築いていくことを祈りたい。

能村 研三

春ひとり

山 姥

森岡 正作

一山の籬の緩める春霞

山姥に先を越さるる蕨採り

螺髪にもかざす花片盧舎那仏

むず痒き水面となれり蘆の角

せせらぎのやうなる街路花水木

鷹化して鳩となりたるポップコーン

菊坂をぶらりぶらりと春逝かす

入学式や始業式も終わつてようやく落ち着いたと思う頃に、ゴールデンウィークがやって来る。高校の部活動では地区大会などがあり、どこのグラウンドでもユニホームの色がとりどりで賑やかになる。

そんなグラウンドの様子と正反對なのが、登四郎先生の「春ひとり槍投げて槍に歩み寄る」という句である。槍を投げる以上、周囲に大勢の人がいてはいけない。この句について先生は、グラウンドの生徒の様子は見慣れているが、槍投げの姿は実景ではなく、「心の奥底にあるイメージとが組み合わせられて出来た一種の心象風景であった」と述べている。

先生の手を離れたこの句からは、物憂げな若者の表情が見て取れ、内向的であった私を沖という結社に限りなく惹き付けたのである。

蒼茫集



行く行くは

千田百里

呼び合うて

辻美奈子

手をつなぐやうに連なり山笑ふ

* 遠足の尻つぼが走り繋がりぬ

悼・北川英子様（朝寝して猫にもなんともなくお世辞の句ありて
コンクリートジャングル歩き三鬼の忌

菜の花を見てなのはないろの灯に帰る

行く行くはふる里捨つる梨花月夜

朝寝されませ背にも猫にも気がねなく

手ぶら

栗原公子

花の屋

宮内とし子

* そこまでのつもりの手ぶら夜の桜

地の罅に音なくしむる花の雨

家電みな女声なり春闌くる

湯煎にて戻す蜂蜜春の屋

横浜三溪園にて
亀鳴くや三溪の夢苔むして

燻り香の土間の暗さよ屋根葺きて

茅屋根に春光ふかと葺き足さる

* 露の姥伸び放題をよるこべり

初花や池を隔てて呼び合うて

全員の合意に土筆出でにけり

春惜しむマンホールよりヘルメット

緑蔭や瀬音にも似て街の音

* セロリ噛むプラス思考の音たてて

春眠やすとんと重力なき世界

菊坂の井戸に手濡らし春惜しむ

木の芽張る東大の空画布として

石あれば石に腰かけ花の屋

花衣連れ立つ人のあらばこそ

花 疲

細川洋子

*目を閉ぢてゐても明るき花疲
しろがねの満月上がる西行忌
梯子から半身ひねり屋根繕ふ
お肉屋コロッケ店先に食ぶ春夕焼
見返り坂といふ雑踏や夕永し
新緑や千本鳥居潜るたび

花 疲 れ

林昭太郎

*包丁の切れにおどろく花疲れ
黄砂降る高速エレベーター昇る
つちふるや靴乱雑に検診車
青葉の夜エンター叩き脱稿す
赤門本郷異隈二句は青春の門燕来る
春惜しむ一葉の井戸汲みもして

重 心

甲州千草

*重心を空へ空へと巢立鳥
鳥帰るキックボードの駈ける坂
両どなり空家となりぬ目刺焼く
夜鳴きせる浅蜷の濡らす桶周り
花は葉に未だ針待つソノシート

かがよへる

大川ゆかり

日のさして涅槃図の雲かがよへる
窓枠の白木明るしヒヤシンス
朧夜の湯に振り洗ふ熊野筆
だんだんと母に似る姉花菜漬
金泥の本の見返し春の雷
*春愁くるむ森の匂ひのバスタオル

由緒書

高木嘉久

葛飾

福島茂

一斉に春光返すオールかな
鳥曇質屋に長き由緒書
* 西口に夕日のちから花水木
広辞苑の薄き埃や竹の秋
最後の荷開ければ赴任先暮春
楡の影濃くして八十八夜寒

入り江とは船のゆりかご桜まじ
佇めば漢詩の浮かぶ春の池
清明や菊坂に汲む井戸の水
* 葛飾の森は大きな抱卵器
水匂ふ葛飾郡蘆の角
目借時乗合バスの最後尾

水田

能美昌二郎

木曾の春

宮坂恒子

* 鳥引くを待ちて水田と成しにけり
剪定の音響かせて枝宙に
落椿これより先に人家なく
満天の星けぶらせて修二会果つ
夜桜を見したかぶりの衣かな
たんぽぽの絮はおのおの風を持つ

長くひく牛の一声牧開き
* 春へ翼生やす次々試着して
いななきの山気ふるはす木曾の春
雉鳴きて山の夕日を尖らせり
勇み立つ音を放ちて雪解滝
俎板を日に干す山の辛夷晴

潮鳴集



家 出 町山公孝

*新緑の中へ一日だけ家出
帽子買ふ春が来たからまた一つ
惜春の掌にやはらかき野面積
春なれや山頭火にもなれぬまま
緋牡丹のかすかなる揺れ雨あがる

衿正す 清水佑実子

安田講堂芽吹く銀杏の黙並ぶ
ゴシツクのアーチ吹きぬく木の芽風
*金魚・菊・鏡・坂の名春惜む
樋口奈津の団欒の日や八重桜
衿正すやうに春田の畦現るる

歩 幅 大沼遊色

湘南の汐風甘し石蓴採る
*さよならは臆始めのことばなり
雨あとの今日の日和や花辛夷
やまひに非ず元気にあらず花粉症
鶯を愛づる歩幅となりにつけり

風生桜 佐々木よし子

隣よりピアノ鳴きだす夕桜
*老桜の胴吹きといふ底力
老いてなほ気高き風生桜かな
野焼三浦あと猛りしづめのやうに雨
虚子の句碑囲める樹々の芽吹き急

風

菊地光子

* 曇る日はくもる明るさ花辛夷
戸袋の夜はからつぽ春疾風
桜東風石の堅さの通し土間
桜散るや風の向かうの木の遊具
水奔り木々は戦ぎて春惜しむ

閉校碑

大沢美智子

君をいざなふ八荒の風黄泉おぼる
神北美智子様
踏切で海と岐るるいぬふぐり
花冷の上段の間の兜かな
亀鳴くや寺の寄進に剪定代
閉校碑いま甲斐駒の木の芽風

育ち盛り

七田文子

* 馬酔木咲く庭園塔を芯となす
雨の日は雨も浅黄に土佐水木
春深く足指浮かす観世音
一瞬の光のつぶてつばくらめ
森は今育ち盛りや囀れり

光の針

佐久間由子

* 湖波のしらべに蝶の影こぼす
川波の光の針や葦芽ぐむ
* 隧道の出口にひらく春の海
踏青の終り太平洋に出づ
閑けさやほむら総立つ牡丹園

ちから

藤代康明

葦の角原三溪の史に尖る
断崖に這ふ根ちからや松の芯
* 桜しべ降る左近碑の錆ちから
理科室に若き玄白蛙鳴く
蜃楼第三海塗は海の底



飛鷹選評



能村 研三

青き踏む第六感の覚むるとき 稗田 寿明

第六感とは人間の視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚以外の、それを超える第六番目の感覚の意。インスピレーション、勘が働くというような時に使われる。

「青き踏む」「踏青」は古式ゆかしい優雅な趣を備えた季語。厳しい冬の間、寒さに縮こまっていたが、青々としてきた野に誘われて外に出た。萌え出る草を踏んで駆け出したり、胸一杯に新鮮な空気を吸うと、身も心も解き放たれ、勘が冴えて体の感覚がはつきりしてきた。

遣唐使絶えしが千年 雁帰る 粟坪 和子

今から千年以上前、日本は唐へ何度も遣いを送り、中国の進んだ文明や文化を学ぼうとした。これが遣唐使である。八九四年に菅原道真の建議によって停止されるまで、約二十回の任命があり、うち十六回渡海している。今より船での行き来も容易でなく困難を極めた時代であった。しかし雁などの渡り鳥は季節になると定期的に大陸へ帰っていくが、その行き来は千年を

遙かに越えた年月を重ねているのだ。

人もまた花のひとひら花ふぶき 小形 博子

散るときは、本当に吹雪のように散る花ふぶき。作者はひとり花吹雪のなかにいて、自分というひとりの人間の存在を考え、いささかの感傷に浸った。今は家族や仲間など周囲に誰かがいてくれるが、いずれは、自分もひとひらの花びらと同じように、ひとりぼっちになって散っていくのだという寂寥感が、落花に囲まれて迫ってきた。

切り干や親子の情のごとき色 岡本 秀子

切り干は、家庭料理の中で親しみのある食べ物である。切り干し大根のやわらかく淡い味に太陽の温かさを感じ、口に入れるだけで優しい気持ちになってくる。故郷の懐かしさをふと思いついたりして、切り干にも何か親子の愛情が湧いてくる。

舟頭の花菜へおろす渡り板 棚橋 朗

牧歌的な渡し舟の風景がよみがえる。渡し舟というと矢切の渡しに有名だが、簡素な船着き場で岸といっても、菜の花が咲き乱れる中に舟頭が渡り板をおろすような簡単なものであった。

春泥につかず離れず象の鼻 中西 恒弘

動物園でのスケッチを句にされたのであろうか。コンクリートの檻の中にも象が親しめるような春泥が敷かれていたのだらう。中七の「つかず離れず」の瞬間を捉えたのは見事だ。

復旧へ花に庄さるる天守閣 大石 恵子

一昨年の四月、二度の大きな地震にみまわれた熊本。市の中心にそびえる熊本城も地震の大きな被害をうけた。城のまわりには咲く見事な桜が復興の進む天守閣を応援しているようだ。

春北風磐のごとくねまる野馬 くらひろこ

青森県下北半島の尻屋岬に放牧されている寒立馬であらうか。厳しい冬にも耐えるたくましい体格の馬で、足が短くずんぐりしているが、春の訪れの遅い北国に吹く北風に磐のごとく横たわっていた。

百千鳥木々の目覚めを促して 水澤千恵子

水澤さんも東北盛岡の方。春の訪れは遅く、百とも千とも沢山の鳥たちが囀り始めると、森の木々たちもそれに促されて芽を吹き始めた。森を目覚めさせ喜びに満ちた囀りである。

常々は目立たぬ家や花 辛夷 川高郷之助

日頃から通勤途中の通い路、足早に通り返るので一軒一軒の家はよく覚えていない。余り個性のない一軒家であったが、辛夷の花がたわひに花をつけているときは、いつになく存在感のある家となった。

啓蟄や古本市に良き一書 嶋本 博司

暖かくなって冬ごもりしていた虫たちが地中よりはい出してくる啓蟄の頃、人間も俄かに活動し始める。古本屋街に行つて極めつけの一書を探すことにした。

花人やスマホを閉ぢて花を見よ 栗山みどり

今の若者たちの世相に警鐘をならすような一句である。寺山修司の「書を捨てよ、町へ出よう」の言葉が思い出される。

*

金魚・菊・鐘・坂の名春惜む 清水佑実子

先日の東京句会の本郷吟行での収穫作品。金魚・菊・鐘という味わいのある坂の名を巡りながら春を惜しんだ。

新緑の中へ一日だけ家出 町山 公孝

年の暮れには「煤逃げ」という便利な言葉があるが、俳句を詠む人は、新緑の美しい頃になるとこうした衝動にかられるのだろう。発想が若々しい。

(潮鳴集より)

そこまでのつもりの手ぶら夜の桜 栗原 公子

特段の目的もなく持つものを持たずふらっと出かけたなら、夜桜がきれいだったのでつい遠出してしまった。予期せぬ行動も俳句を詠む人には必要なかも知れない。

遠足の尻つぼが走り繋がりぬ 千田 百里

遠足の列はいくら先生が口うるさく注意してもどうしても乱れてしまうもの。しかし先生の号令で尻尾の集団が俄かに走りだしたので列が繋がった。細かいところの描写が効いている句である。

(蒼茫集より)

沖作品



能村研三選

* わが顔のまあるく映る春の水

青き踏む第六感の覚むるとき

ホームランボールを拾ふ春野かな

川沿ひの縦列駐車花の午後

風光る流線形のヘルメット

遣唐使絶えしが千年雁帰る

絹をもて雛の雪洞みがきけり

* 荒砂の上曳きずりて若布干す

浪民の賢治はいかに青き踏む

海自慢それから瓜のうまきこと

草だんご母は寅さん好きだつた

人もまた花のひとひら花ふぶき

* 鳥交る大樹の下のおままごと

夕映えの河口の要花辛夷

元禄の津波供養碑浜大根

千葉

稗田 寿明

市川市

栗坪 和子

千葉

小形 博子

陸あげのボートに櫂や雪催

浅草の車夫軽がるとかぎろへる

切り干や親子の情のごとき色

口ダン像落花の中の黒光り

* 子には子の帰る家あり鳥雲に

* 春一番鎧ふ木の芽を吹き覚ます

菜を洗ふはけの引き水ほのぬくし

菖蒲の芽風に応ふる丈をなす

枝うつる影がかげ追ひ囀れる

舟頭の花菜へおろす渡り板

墨堤に被災の記憶桜咲く

春泥につかず離れず象の鼻

* 探鳥の靴に乾きし春の泥

繫船のごつりごつりと春の闇

朝寝して時代遅れの予感かな

岡本 秀子

棚橋 朗

市川市

中西 恒弘